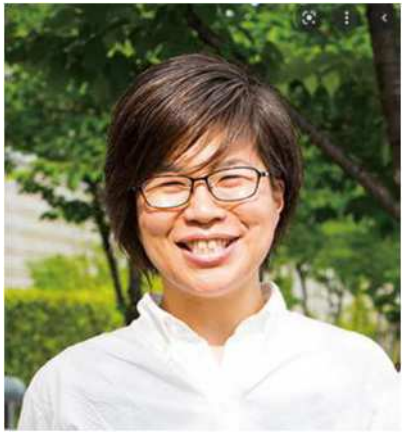
○ゲストスピーカー



全国まちなか広場研究会　山下　裕子（やました　ゆうこ）氏

広場（ひろば）ニスト/ひと・ネットワーククリエイター

2007 年よりグランドプラザ運営事務所勤務。2011 年より NPO 法人 GP ネットワーク理事。2013 年より全国まちなか広場研究会理事。2014 年より、まちなか広場研究所の屋号で個人活動開始。様々な地域のまちなか広場づくりに地元の伴走者的立ち位置で活動中。著書に『にぎわいの場富山グランドプラザ-稼働率 100%の公共空間のつくり方』（学 芸出版社）、『生きた景観マネジメント』（共著・鹿島出版会）、『コンパクトシティのアーバニズム』（共著・東京大学出版会）

心に残るまちなみ 54 長野県松本市

松本城周辺で出会えた、豊かな路上空間

路上には、棚もある。果実がなる樹種であれば、芽吹き・新緑・つぼみ・実り・紅葉の季節それぞれに、楽しみが豊かになる。

山下裕子（広場ニスト／ひと・ネットワーククリエイター）

でかけた先では、まちなみを味わおうといつもたくさん歩く。看板の書体・飲食店の献立や匂い・軒先の設え・物の配置等にも、その町の文化は現れている。まちなみを感じる場所は、大抵路上である。路上には建物が建てられないから、見通しができる。そしてそれが、その町の魅力となる。先日訪問した松本では、住宅地からもお城の姿が垣間見えた。いや、多分、逆である。城への見通しが生まれるよう、道がひかれたのであろう。とある町では、お城が見える場所に皆が自宅を建てるがゆえにコンパクトシティ（寄り添い集まって暮らす）になったと聞く。いつもふれていたい風景が地元にあり、自ずとシビックプライドが育まれる。理想的だ。松本にも、それを感じる。市街地にも湧く水は喉を潤し、大樹が木陰をつくり、辻ごとのそうした風景が律動を刻み、歩いて楽しい路上を形成している。その路上に、いま、うねりが起きている。歩行者優先であり、居場所づくりであり、これからの移動のしやすである。これまでも郵便ポスト・消火栓・ゴミ収集等地域社会の基盤として活躍してきた路上。その空間構成や活用策が、あらためて問われている。

ここしばらく、素朴であるが大切な「でかける」行為そのものを意識している。2040年には、3人に1人が高齢者（65歳以上）となり、しかも約4割が単身世帯となる個の時代。個を孤独に直結させないための地域社会の在り方が模索されている。若輩ながら歳を重ね実感するのは、待合わせや親睦会といった約束に対して億劫になっていく事実。そこで想うのは、自分がたくさん歩けなくなった際に、自宅からでかけたら自分の居場所があって、美しく楽しい眺めがあって、たまに気の合う顔見知りが通りかかり、たわいもない話に花が咲いて、喉が渇けばお茶をして、お腹が空けば美味しい軽食がいただける路上があれば、きっと心強いだろう。さらに空地増加を好機と捉え、ゆとりある路上周辺を“車種”ではなく“速度”で区分してみるのはどうだろうか。たとえば、生活道路（30km/h以下）内であっても5km/h（歩行等）・15km/h（自転車等）・30km/h（車両等）で区別し、互いの安全性と快適性を高める。それらが叶えば、自分自身の体調や気分や同行者や荷物の量や天候によってでかける場所と移動手段の両方を自由に選択できる豊かさが生まれる。でかけてひととふれあい心身ともに健やかに暮らし、たまに遠くまででかけられる元気を自分自身で持続できる。理想的だ。

街角の居場所には、時間帯によって多様な利用者がありそうだ。壁面のポスターに、その様子が垣間見える。

表紙：松本城北隣に鎮座する、松本神社前のケヤキのそばにある「松本神社前井戸」で水を汲む家族。
裏表紙：国宝旧開智学校のそばにある松本市立開智小学校隣接のバス停。向かいには松本幼稚園があり、木陰で園児の様子を眺めながらバスを待てる。

山下裕子（やました・ゆうこ）
2007年よりグランドプラザ事務所勤務。2014年より個人活動開始。地域の広場づくりに地元の伴走者的立ち位置で活動中。著書に『にぎわいの場 富山グランドプラザ―稼働率100％の公共空間のつくり方』（学芸出版社）、『生きた景観マネジメント』（共著・鹿島出版会）、『コンパクトシティのアーバニズム』（共著・東京大学出版会）。

「まちなか広場とは、人の居場所。」みる、みられ、みせて、横につながる

全国まちなか広場研究会 理事、NPO法人GPネットワーク 理事
（株）ハイマート久留米　ひと・ネットワーククリエイター　山下　裕子

「虚はすべてを容れるが故に万能であり虚においてのみ運動が可能になる。」（「茶の本」より抜粋）という岡倉天心の言葉がある。「まちなか広場」とは、広い空間であり、それ自体は空っぽの「虚」である。そして、そこが人の居場所になれば「みる⇄みられる」の関係性がうまれ、「みせる」よろこびがうまれる場所となる。これが、「まちなか広場」の基幹的な機能であると筆者は考えている。「みる」とは、漢字で表記するだけでも「見る。観る。視る。診る。看る。」等があるように多様であり、それぞれに意味がある。「（人を）みる」ことは、人が「人間」として在るための根源であるところの「他者と自己」が居てはじめて成立する行為でもある。人間同士が「ある場所」で空間と時間を共有することは尊く、その共有という行為そのものが、人が生きていくうえの不可欠な要素であると考える。また、空間と時間の共有は、人々が「ある場所」に出向いてこそ成立する事象でもある。

先日、ある地方都市の駅で面白い体験をした。駅に到着しスマートフォンでSNS（Social Networking Service）をチェックしていたところ、自分がこれから乗る予定の電車に友人が乗っており、入れ違いで降りてくることを偶然知ったのである。すぐに我々は連絡を取り合い、ホームでわずか30秒であったが一年ぶりの再会を果たした。このようにSNSなどにより世界中どこからでもほぼリアルタイムで家族・友人・知人の近況を知ることができるようになった現代だが、各自が積極的に発信作業を続けるからこそ成立しており、その前提としてパソコンやタブレット・スマートフォン等の道具やネット環境等が整っている必要がある。しかし、まちなか広場とは、そうした前提となる道具やネット環境を必要とせずに空間と時間を共有できる場所であり、計画・整備・管理・運営の仕方次第によっては、多世代の市民にとって出かけていける都市のなかの「居場所」となりえる場所である。そのようなまちなか広場は、都市の交流拠点として必要不可欠だと考える。

筆者は、富山市まちなか賑わい広場（愛称グランドプラザ）を開業時から7年間見続けた知見から各都市の広場整備の相談に応じる活動を通じて、また2013年に立ち上げた「全国まちなか広場研究会」の活動を通して、単なる広い空間整備だけでは日常的に市民が憩える「人の居場所」には成り得ない現状を目の当たりにした。それでは、あと何が必要なのだろうか。この稿では、その「何か」を読み解いてみたい。

「まちなか広場」に出かけていける環境とは？　公共交通×公共広場

いま、私たちが想い描く日常的なにぎわいとはどのような場面だろうか。子どもたちが笑顔で遊び、それを眺めながら日向ぼっこをしている高齢者たちの姿が日常的に見受けられる光景もその一つではないだろうか。実は、日常的にまちなか広場に出かけ余暇を過ごせる市民の大多数は子ども・学生・高齢者らであり、交通弱者と呼ばれる自家用の交通手段がないため公共交通機関に頼らざるを得ない世代なのである。

そこで、「公共交通」という言葉のなかに「歩きたくなる動線の整備」や、「いつの間にかそれなりの距離を歩けてしまうリズムある景観の整備」を内包することを提案したい。そう考えたのは、筆者が富山市在住時に市役所が“歩いて暮らせるまちづくり“を目指していることを知り、勤務地が中心市街地に移るのを機に（マニュアル車を運転するほどの車好きだったのだが）車の所有を辞め、自ら公共交通の利用者となった経験のためである。この時の経験から駅・電停・バス停までの動線や景観、停留所の快適性、乗換時のスムーズ性、そして、時刻表を確認せずに停留所に向かう心境に成り得る運行間隔（20分以内に一本は運行）が、公共交通を快適に活用するためには不可欠であることを実感した。また、各々の拠点から拠点への移動は当然であるが歩行であることをあらためて体感したためである。

地方都市の中心市街地の多くは、公共交通の起点とな

るターミナル駅の近隣もしくは周辺であることが多いため子どもや学生をはじめとする車が自由に使えない人も、また足腰に少し不自由を感じるようになった高齢者もアクセスしやすいエリアである。そこに魅力ある空間としてまちなか広場が整備されれば、多世代の市民が目的をもたなくとも、買物をしなくとも公共交通を活用して「出かける」機会を自らもちやすくなるのではないだろうか。

様々な行き来によって、いきいきとした場所になる

人が出かけ滞在し憩うことで人の姿が定着し、まちなか広場が「人の居場所」になるようである。そこで、憩うための必須アイテムとして、次の５点を提案したい。①（拠り所となり安心感につながる）背もたれ付き椅子＆（均しい距離感を成立させる）正円テーブルの（見た目でここは人の居場所と認知させるため）15セット以上の配置、②（真夏に日陰をつくる）大型植栽やパラソル、③（寒気に日向ぼっこができる）陽射しの確保、④（安心して憩える風向きを踏まえたうえでの）都市軸線上での配置、⑤誰もが座っていて良い雰囲気。この５点を考察すると、人も動物であり人と自然が行き交う屋外空間のなかでまちなか広場をとらえるべきと再認識する。

また、気温差も重要であり同じ気温でも昨日にくらべて暖かくなったと感じられれば外出するが、寒くなったと感じられれば外出を控える。都市において自然の風を感じられる場所でもあるまちなか広場では、その日の天候や陽射し風の強さや前日との気温差を感じながら広場を見守り配置を考慮できる豊かな感性を持つスタッフの存在と、その感性を表現できる柔軟性に富んだ手順手法（マニュアル）も不可欠である。

振り返ってみるとグランドプラザ開業時の心得のひとつは、毎日毎日繰り返し椅子やテーブルの模様替えをすることであった。決まった型で整然と並べ続けるのではなく、そこで起こってほしい場面を想像しながら近づけたり遠ざけたり様々に配置し、配置後も観察し試し続け、数年をかけて幾重かの配置パターンを解明できたように思う。古来、日本の庭園や茶室は数年に渡ってその場所の太陽・月の動き、草木の成長や四季のうつろいを観察し手をかけ続けたと聞く。その結果、数百年後のいまも見事な時をすごせる人の居場所として愛され継承されているのであり、まちなか広場も同じようにとらえるべきではないだろうか。

また、まちなか広場を「人の居場所」にするためにも隣接する施設は、広場に何らかのアクティビティや活動のにじみを創出する業種業態を入居させることが望ましいと考える。そこで、家賃の支払能力だけで入居者を決めるのではなく、広場へのにじみ要素（開口部における視線透過性の高い外観、往来が発生する運営形態（テイクアウト商品有無等）、出店プログラム（手芸ショップであれば編物教室の広場開催）等）も入居者募集時の項目として挙げてはどうだろうか。また、開業時には、広場スタッフ自らが憩う人の姿を徹底して創出する姿勢も大事である。まちなか広場を居心地の良い雰囲気にするためにも、スタッフ自らお洒落をして憩おい広場を楽しんでほしい。森や草原に獣道がひらかれていくように、自らが佇むことで人が居る場面をつくり、アクティビティの種となり水をやり続けることも開業時の大切な運営業務として捉えられたらと思う。雪国である富山市民に限らず農耕民族である日本人にとって、他者からみられる場所であるオープンスペースで憩うことはかなり抵抗のある行為のようだ。しかし、都市として富山市が素晴らしく変わりはじめた15年をそこで暮らし、まちなか広場が「人の居場所」になっていくプロセスに関わって感じたことは「ヒトもマチも前向きにかわっていける」ということである。

望ましい出会いの機会とは

日々の出会いについて考えてみたい。私たちは幼少期から無意識のうちに、保育園・幼稚園・小学校・・・会社、PTA、自治会等の何らかの組織に所属し法や制度に守られている。一方、もし震災の避難時やＩターン移住後の就職活動の最中、無職での単身暮らしをはじめる等それらの所属から一時的に離脱してしまう事態に直面した場合は、どのような状況になるのだろうか。学校や会社といった通い先があれば新しい組織に所属するためすぐにその状況から免れることが可能であるが、就学前の子どもを育てる母親や無職と呼ばれる高齢者等が何らかの事態によって所属を持てない場合はどうであろうか。

避難時等には様々な団体が活発にボランティア活動等を実施されるが、その様な活動に自ら積極性をもって参加すること以外の解決策はないものだろうか。積極性を持つ筆者でさえそのような状況時に、縁も所縁もない初対面の人に「はじめまして」と自ら話しかけ行動を起こせるとは思えず、不安が先立つのが正直なところである。

ところが、その地域に暮らす市民にとってアクセスしやすい場所である中心市街地に、常に誰にでもひらかれた広場を整備しそこが居心地の良い「人の居場所」になればどうだろうか。筆者は、グランドプラザに開業時から７年間勤務しそのプロセスを目の当たりにしたのだが、

例え大きなイベントを開催しなくても多くの人が日常的に訪れるようになり、人と人とが出会い交流が育まれるのである。

グランドプラザでは、24時間年中無休で居心地が良いためか自ずと多種多様なアクティビティがうまれ育まれている（例えば、それは、出勤前のブレイクタイム、編み物・スケッチ、帰宅前の一服、待ち合わせ、酔いさまし、夜明け前の缶コーヒー、等々）。そして、地域の中心市街地が活性化すれば、このような小さな経済活動をはじめとする様々なアクティビティが活発となり朝昼晩の明快な線引きもなくなり入り混じる。

まちなか広場では、同じような時間帯に立ち寄り憩う人同士が知り合いになってたわいもない会話をはじめたり、感じよく飲み交わしたり、お互いの存在を認知しながらもただ眺め合っていたりと様々な関係性がうまれ育まれる。そして、世間には、おしゃべりをするのが好きな人もいれば面倒な人もいて、さらにはその時の気分もあるが、まちなか広場とは誰でもがその時の気分や状況に応じて居心地良く憩えるような場所であって欲しいと願っている。

ネットワーク型のサードプレイスが育まれる「まちなか広場」

サードプレイスとは、「創造的な交流がうまれるアンカーとなる場所」（The Great Good Place “Ray Oldenburg 1989より抜粋）とある。まちなか広場は、「場所」としてもサードプレイスに成り得るが、地域の自治を機能させてきた人と人とが横につながることで育まれるネットワーク型のサードプレイスを育む場所でもあるように思う。

グランドプラザの立地は、都市軸上（JR富山駅⇄市役所⇄神社）であり、尚且つ中心市街地で駐車台数が最も多く広く停め易くしかも一番安価な駐車場と、まち一番の目的地である市内唯一の百貨店の間である。大きさは、幅21 m×奥行き65 m×高さ19 m。人が何か出来事を起こしたくなる空間の最小サイズであり、一人でもくつろぎ憩うことのできる最大サイズではないかと感じている。また、約1,400㎡の広場に面して、アクティビティがにじむ業態である茶処5店舗と食事処1店舗があるのも特徴である。さらに、2009年12月には市内環状線LRTセントラムが開業し「グランドプラザ前駅」徒歩10秒という公共交通での好アクセスまで整備された。また、富山市は、田舎過ぎず大都会過ぎず顔馴染みと時々すれ違える密度感である約42万人（合併前約30万人）の中核都市であるという人口サイズも好適であったように思う。

そのような富山市の中心市街地に、大きな余白空間であるまちなか広場を誕生させたことで市民共有のリビングルームとしても活用されている。自分の日常を広い空間である広場で過ごす市民が増えたことで心と時間にゆとりを持てるようになり、個々の視野やネットワークが広がったように感じる。また、広場そのものがイベントの開催地となるのみならず、中心市街地内の他の場所で開催されるイベントのPR活動拠点にもなり様々な活用がなされることで主催者同士・参加者同士・主催者と参加者等の「横のつながり」もうまれている。例えば2010年、2014年とサッカーワールドカップのパブリックビューイングが広場で開催され両年とも約2,000人を集客した。開催には数百万円の予算が必要と聞くが、この予算を2010年は一社での確保が可能であったが、2014年は一社での確保が厳しい状況であった。しかし、「あの感動を再び！」と願う様々な立場の人々（テレビ局・スポーツ用品店・日本代表ファンのバー店主等）が各々、広場の運営事務所を訪ねて来られ、横のつながりの接点として事務所が存在したことで開催を熱望する声が結果として集積したのだ。そこで広場スタッフは、すこしお節介をして事務所を提供し熱望する関係者が一同に会する作戦会議の場を設定した。そのような経緯を経てイベントが成就したのだが、当日は、関係者同士のつながりの深さや開催までの語り尽くせない物語のためか鳥肌が立つほどの一体感と熱狂のなか開催され、無事に閉幕した。

人との縁やつながり、個々の特技や好み、そして自慢のコレクション等の情報は、引継ぎ書面には現れないのが現状である。しかし、地域の真ん中に整備され、そこに暮らす市民同士が「みる⇄みられる」関係となり、ひとに「みせる」よろこび（ハレ）の場となったまちなか広場では、「○○が好き」という同じ気持ちによって集まり横につながってイベント（祭り）を開催している事例が多く見受けられる。そして、「好き」という気持ちでの集まりだからこそ継続され恒例となり、開催後の打ち上げは単なる宴ではなく反省会であり次への作戦会議となり、未来への思考の呼び水となる。グランドプラザのホームページ（grandplaza.jp）をご覧いただければ一目瞭然だが、今年度もすでに相当先までの予約が多数掲載されている。

どうやら「横のつながり」をうみ育む、ささやかであるが大切な情報は生身の人間に蓄積されるようである。地域の大切な基盤である「横のつながり」をうみ育て伝承するための場所としても、まちなか広場の運営は重要なのではないだろうか。

オリジナル条例のススメ

「富山市まちなか賑わい広場条例」の存在も秀逸である。富山市役所は、再開発事業の敷地内にあった市道三本を集約し道路指定を解除し、その空間のために条例を制定しているのだが、内容は、地域に暮らす「みんなの居場所」となるようあえてほとんど何も禁止事項の無いものとなっている。この条例が土台、後ろ盾となって市民自らが自由に活発に活用しながら共通の作法を育める環境を整え、運営そのものを実験と捉え開業を迎えたのである。

逆に、禁止事項がほとんどないため取り締りもできず、「不祥事が起きるのでは？」と尋ねられるが、市民の暮らしに馴染むまでは色々なトラブルも起き、現在でもそれなりに多少の出来事はあるが中心市街地に立地している以上それはある程度当然であると考えている。

それでも奇跡的に約７年半の間、割と安全に運営を続けることができているのは、まちなか広場に人が居て人の目がある状況を維持することで、様々な事象が時間をかけ人の目によって自然淘汰されているためではないかと考えている。年間 100 件以上のイベントの開催で多種多様なアクティビティが数年の時を経て地域の文化に寄り添い受入れられはじめ、ますます「みんなの居場所」として愛され大切にされているように思うのである。

全国まちなか広場研究会の発足

富山市が国の中心市街地活性化基本計画の第一号認定を受けた年でもある 2007 年から視察依頼は年間数百件を越え、ここ数年は広場そのものを目的とする視察も増加し、「まちなか広場」への関心が高まりつつあることを実感していた。一方で、広場に関する文献や運営手法等の情報の少なさに驚いてもいた。そこで志を同じくする仲間とともに「全国まちなか広場研究会」（machinakahiroba.com）を立ち上げ、第１回研究会を 2013 年９月に富山市で、昨年９月には第２回研究会が長岡市役所併設の広場であるアオーレ長岡で開催した。本研究会の目的は、『まちなか広場の価値に関する研究を行い、広場の整備と管理運営の望ましいあり方が普遍化されることに寄与することを目的とし、「公共広場」×「公共交通」の連携による価値の創造が都市における基幹事業と位置付けられることを目指し』ている（設立趣旨書抜粋）。参加者は、都市計画、行政学、建築、交通、マーケティング等多様な専門性を有し、その立場は研究者、行政職員、コンサルタント、学生、市民であり、まちなか広場に新たな可能性を感じている者同士のしなやかな寄り合いの場となっている。

研究会自身もお互いを大らかに包み込む広場的な在り方を目指しており、まだまだ実験段階であるのが実情である。初年度は全国の広場事例発表をメインとし、昨年度は分科会を設けテーマ毎にグループ討議を試みた。分科会は結論を求めるものではなく参加者が各々の立場や事業状況を背景に、法や制度、憩い施設でありながら集客施設でもある故の課題、広場に配置される椅子のデザインや運用の在り方にいたるまで生々しい意見を出し合いながらもお互いの立場を尊重し、さらなる展開を視野に見据える仲間づくりの場であったように感じている。

そして、まちなか広場への探究心はふくらむばかりで、すでに今年度の方向性を探りはじめている（第３回は 2015 年 11 月６日姫路市にて開催）。こうした異なる分野同士の横のつながりや、形式を定めない自由で活発な議論や発表の場が、我が国の「まちなか広場」の新しい在り方の模索を推進し、リアルないきいきとしたプラットフォーム形成につながることを願っている。

おわりに

先日、ある地方都市でその地域に暮らす若者 15 名と約４km の道のりを歩くまちなか散歩を実施した。終了後の参加者の感想の多くは、日々の日常では用事のあるポイントだけを車で行き来するもしくは自転車で巡るため中心市街地をこれほど歩いたのは初めてというものであった。我々人間の動体視力は自らの足で移動する歩行速度に適したものであり、歩行より速い速度ではみえなくなるものが増える。自分の足で楽しみながらゆっくり歩く散歩を通して、知っていたつもりのまちなかにたくさんの出会いや新鮮な発見が多数あったようだ。

京都には「哲学の道」と呼ばれる道がある。歩くことでリズムがうまれ、脳にも身体にも運動がはじまり新陳代謝や思考が活発になるのだと思う。また、出かけることによって人や出来事、四季のうつろいと出会い、それらは様々な発見をもたらす。日々の食事にも季節の彩を添える我々日本人の感性を今一度取り戻すためにも、歩くことは不可欠なのではないだろうか。そして、歩くことの中心に「まちなか広場」が存在することで、活発になった思考や新たな出会いから多種多様な人同士がつながり、お互いを巻き込みリレーショナルな営みが発動され、さらに磨かれた自己の感性によっていま必要とされるイノベーションが力強く起こっていくことを願っている。

（やました　ゆうこ）

エッセイ

何かあったら話し合って決めよう。広場「グランドプラザ」、いまの深夜の空気感

山下裕子

あと1時間で明日になる頃、暗がりに浮かぶ白文字と赤円と斜線。街でよく目にする禁止記号が、277インチの大型ビジョンに光っている。私がこの広場の運営に携わっていた2014年頃の放映時間は10時～22時であったから、いまも変わらず模索の日々が継続しているのだろう。

相手の表情がわかる限界距離と言われる20mの道幅に、細部まで美しくデザインされたガラスの屋根（天井高21m）でつつまれた広場は、ほのかな闇に包まれ〝夜〟も愛される屋外空間になっている。闇夜にかがやく記号のたもとでは、ダンスの練習をする少年少女、酒缶を手に彼らを眺める初老男性、自身のPCで映像と音楽を黒縁ヘッドフォンで楽しむ青年の姿があった。彼らは言葉を交わしていないが、距離感を保ちながら呼応し、互いの目（視線）によってセーフティを保ちながら、深夜独特の空気感を楽しんでいるように見えた。

「夜中3時までやっているラーメン屋が1軒でもあれば（人口規模に関係なく）夜更けを好む人もそこで生きていける」は、宮口としみち先生（※1）の言葉。そんな感覚の活動が芽生え、暮らしの豊かさには普遍性があることがクリアになった、コロナ禍の2020年。この年も、私はたくさんの地域を訪問する機会を得て、それを実感した。

07年に開業した「グランドプラザ」は、富山市が定めた条例（※2）によって道路指定を外し、禁止事項がほとんどない（貼り紙などのみ禁止）余白だらけのルールをつくり、「何かあったら話し合って決めよう」としている。それは、生身の人間が大勢いるため、状態が常に変化するまちにとって素直な考え方のように感じるし、価値観の変動期である現状にマッチした対応ではないだろうか。

じつは開業当所、ストリートカルチャーを好む若者たちの対応に随分と悩んだ。しかし、ストリート文化を愛する市若手職員の思いが若者たちとの調整力を高め、若者たちのニーズがクリアになったことで（郊外ではあるが）ストリートスポーツパーク（※3）が整備された。そして、そこで練習している高校生がスケートボードのメダリストとなり、また、そのパークを設計したチームがオリンピックのBMXとスケートボード公式競技場を設計したと聞く。身近な環境だけでは出会えない人や物や事にまちで出会い、その出会いによって思いもよらない展開が起こることがわかる。

昨年度、とある会（※4）での赤澤宏樹先生（※5）の言葉が忘れられない。「行政の役割には、ポリシーメイキングとサポートがある。ポリシーメイキングというのは行政が勝手に作るのではなく、みんなの意見を聞いて作ったポリシーをオフィシャルなものにすることであり、それは行政にしかできない」その通りである。

公共空間が「都市の自由空間（※6）」として機能し、その場所によって多種多様な人々がさまざまな経験を重ねながら、互いの傾聴力も磨く。それこそがダイバーシティの近道と感じられてならない。

※1 早稲田大学名誉教授、文学博士
※2 富山市まちなか賑わい広場等条例
※3 富山市ストリートスポーツパーク（愛称：NIXSスポーツアカデミー）
※4 大阪市大公園の魅力向上に向けたあり方検討懇談会
※5 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教授
※6 『都市の自由空間 街路から広がるまちづくり』鳴海邦碩著／学芸出版社

やました・ゆうこ
2007年よりグランドプラザ運営事務所勤務。14年より個人活動を開始。地域の伴走者的かかわりで活動中。著書に『にぎわいの場 富山グランドプラザ－稼働率100％の公共空間のつくり方』（学芸出版社）、『生きた景観マネジメント』（共著・鹿島出版会）、『コンパクトシティのアーバニズム』（共著・東京大学出版会）

開業10周年記念イベント『SOGAWA SOGOOD』でのワンシーン（2017）

ある夏夜に通りかかった時の風景（2021）

写真提供：山下裕子さん